二〇〇二年八月一一日　掲載

**読売新聞　論点」**

# 環境に配慮した住まいを

**濱　恵介**
大阪ガス　エネルギー・文化研究所　研究主幹

日本の住宅は平均三〇年くらいで建て替えられている。欧米の百年前後と比べて、あまりにも短命だ。時間が醸す味が出る前にゴミとなってしまい、その繰り返しではいつまでも本物が蓄積されない。

およそ四年前、私は転職に伴い永住の住まいを関西で求めることになった。歴史的蓄積と自然環境の身近な関西には、首都圏に比べより質の高い暮らしの可能性を感じた。

近年とみに話題になる地球温暖化の危機やエネルギー資源の有限性を考えると、住宅づくりでも省エネルギーを真剣に考える必要がある。資源の枯渇や地域の廃棄物問題と関連付ければ、簡単に取り壊したり新築したりすることもためらわれる。

そこで、築後三〇年近いが、しっかりした構造の戸建て住宅を購入して、環境にできる限り負担をかけないという目標で改修することにした。既存の資源を活かし「環境共生住宅」に再生した訳だ。

暖房エネルギーを減らすため、外壁に外側から断熱を施し、窓ガラスを二重化した。内装材には健康にも良く、廃棄された時に問題のない自然素材を優先して選んだ。

太陽エネルギーを積極的に利用しようと、太陽光発電や太陽熱給湯などの設備を設けた。また潤いを求め屋上テラスには様々な植物を植えた。

そんな住宅に暮して約三年、住むこと自体が楽しく、環境やエネルギーに対する感覚が澄んで来た。

太陽が暖めた湯で風呂に入るとする。物理的には同じ湯でも、自然の恵みに感謝したくなる。また入浴が遅くなると湯がぬるくなるので、自然のリズムに生活を合わせざるを得ない。それが爽やかに感じられる。

太陽光発電の余剰分は、普通の電灯料金と同じ単価で売れる。「せっかく売れるものを浪費できない」と、無駄をなくす総点検をした。様々な工夫の結果、年間の発電量が消費量を二〇％上回った。省エネ行動が伴えば、わずか二〇㎡のパネルで住まいの電力自給は可能なのだ。

別な角度から見れば、住人はエネルギーの消費者であると同時に生産者へ立場を変えている。それが環境への意識改革を後押しする。より賢い消費者になったということか。

また、自ら住宅に手を加えることで、より住みやすくなる。同時に愛着も強まり、維持管理にも目が届き住宅の価値が高まる。「どうせ次の人は壊してしまうのだろう」と考えては住宅をよくする気持にならない。

長く使うため、住宅は最初に質の高い構造躯体を作る必要がある。そして、住人が時間をかけ心を込めて作り上げるべきものだ。集合住宅でも借家でも、その精神は同じはず。

「二十一世紀は環境の世紀」と言われる。その意味は「地球環境を守れない限り、人類文明最後の世紀」と解釈すべきだ。

破たんを避け、健全な社会が持続するには、生産・消費・廃棄の浪費的な一方通行から、ストック型であり循環型の社会構築を目指すしか道はない。

この目標に向かって、市民一人一人が自分の判断と費用負担で貢献できる場、それが住宅と日常生活だ。

質の高い住宅を大切に使い続け、環境負荷の少ないエネルギーで、自然の恵みに感謝しつつ心ゆたかに暮す。これから求められる住生活とはこのようなものだろう。

市民の良識だけでは限界がある。この方向性を確実にするため、住宅の取り壊しは許可制にする、新築住宅は高品質で長寿命のものに限定するなど、建築関係の法制度も省エネ・省資源の視点から強化する必要があろう。

＊＊＊＊

住都公団を経て98年から現職。著書「わが家をエコ住宅に」。58歳。